

# ぐんまの「魚道」を考える（１）

はじめに

私は魚道と付き合いはじめて約30年になります。これまで、“画期的”とか“日本初”とかの魚道がたくさん出現していますが、今現在でも魚道に関する問題が絶えません。このことは、生態学と工学の橋渡し施設である魚道の計画、設計、施工、維持管理がいかに難しいかを示しているものだと思います。私の経験を中心に、何回かに分けて魚道の問題等を群馬県内の実例を見ながら考え、“楽しんで釣れるぐんまの川”を取り戻したいと思います。

## 【 第1回：天然アユが遡上する魚道】

平成21年の碓氷川では、天然アユ(?)が安中地区(久芳橋)付近まで遡上し、釣り人が絶えなかったようで、投網解禁時では一人で、3桁のアユが取れたようです。

烏川から碓氷川に入ると、金ヶ崎の取水堰と板鼻の取水堰があり、従来から遡上の障害となっていました。しかし、両方の堰に魚道が整備された結果、アユが上流まで遡上出来るようになったようです。堰の管理をしている人の話では、アユと思われる大きな魚群が金ヶ崎の魚道を通じたのを目撃したとのことでした。

なお、両魚道とも「ハーフコーン式魚道」という形式の魚道で、群馬県蚕糸園芸課水産係で整備したものです。

金ヶ崎堰の整備例

(魚道設置前)



(魚道設置後)



魚道設置前は、ある河川流量時に稀に遡上した例があったようですが、良い魚道を設置すれば確実に遡上期待できます。このような、魚道を整備して、きれいな川で美形の天然アユの強い引き味を堪能したいものです。

「自己紹介」氏名： 福田 睦夫 1952年群馬生まれ、高崎市在住。釣り好き。

職業： プロフェッショナルエンジニアもどき